

石子さま

昔むかし、柳沢の村に、忠助とおきよという夫婦がいた。働き者で内福もよかつたが子供のないのが、玉にキズだった。神仏に一生懸命祈つても願いはとどかなかつた。ある秋の夜、二人の枕辺に神様が現れた。それから二人は近くの沢に入り、禊をするようになった。必死の思いで水につかりながら、毎日神様におすがりすると、どこからか赤子の声がきこえた。声の聞こえる所を探し求めて沢の中をみると大きな石の底からかすかに赤子の泣き声が聞き取れた。

やがてこの泣き声も聞こえなくなり、二人は単調な日々の暮らしを続けていた。幾月か過ぎ、木々の芽がふくらむころ、おきよは玉のような子をうんだ。村人達は“神授かりの子だ”と噂しあつた。「あの沢の大きな石が二人の熱意に応えてくれたのだ、神が宿る石に違いない」

噂がうわさをよんで、村の衆の意見となり、その石を「神体として祀るお堂がみんなの奇進で建てられ、忠助夫婦が子を授かつたので「石子様」とし、沢も石子沢と呼ぶようになった。